

井上円了の台湾巡講に関する資料（二）

佐藤 厚

satou atsushi

本稿は前稿（一）に続き、井上円了が明治四四年の一月から二月にかけて行った台湾巡講に関する資料である。前稿では『台湾教育会雑誌』、『台湾時報』など、雑誌、単行本記事を収録したが、本稿では『台湾日日新報』の中から円了に関する記事を収集、整理した。

〈凡例〉

- ・本資料は『台湾日日新報』の記事で円了に関するものを収録したものである。『台湾日日新報』には日本語版と中国語版の2つがある。
- ・見出しの中、無印が日本語、*印が中国語である。
- ・中国語の中、もとの日本語がある場合には一覧表の番号を用いて（No.〇訳）とした。日本語訳が見当たらないものは記さない。
- ・読みやすくするために、原文に句点、読点を補った場合がある。
- ・漢字の旧字体は新字体にした。

12	(広告) 台湾教育会	同右
11	東洋協会講演会	明治四四年一月一四日
10	* 哲学演説	同右
9	* 官紳紀事	同右
8	時事小言	同右
7	(広告) 台湾教育会	同右
6	基隆に於ける井上博士	明治四四年一月三日
5	(見出しなし)	明治四四年一月一二日
4	* 井上博士巡行講演 (No 3 訳)	同右
3	井上博士の巡回講話	明治四四年一月八日
2	* 官紳紀事 (No 1 訳)	同右
1	(見出しなし)	明治四三年二月一五日
No	見出し	刊行年月日

〈表1〉『台湾日日新報』の中の井上円了関係記事一覧

- ・記事には振仮名が付いている場合もあるが、ここでは難読字を除き振仮名は付けない。
- ・判読できない文字は■で示した。
- ・記事によっては内容を説明するための注を付けた。

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
* 旅館幽霊 (No 24 訳)	* 哲博将来	* 参拝台湾神社 (No 25 訳)	* 博士巡遊日程	台湾神社参拝	日の丸館の幽霊	(見出しなし)	十把来	台北医院の精神講話	一昨日の東洋協会講演	無絃琴	井上円了顔写真	(広告)	* 紀東洋協会講演会 (No 11 訳)	* 開講演会	* 博士近什 (No 6 訳)	時事小言
同右	同右	同右	明治四四年一月一九日	同右	同右	同右	同右	同右	明治四四年一月一七日	同右	明治四四年一月一六日	同右	明治四四年一月一五日	同右	同右	同右

46	井上博士揮毫…写真	明治四四年二月一五日
45	*官紳紀事	明治四四年二月一三日
44	*博士講演	明治四四年二月一日
43	(広告) 井上博士講演	明治四四年二月一〇日
42	(広告) 井上博士講演	明治四四年二月九日
41	*井上博士講演	明治四四年二月七日
40	井上博士講演	明治四四年二月六日
39	*博士将来	明治四四年二月四日
38	世論一般	明治四四年二月三日
37	*大演説会	明治四四年二月一日
36	*開会演説	明治四四年一月三〇日
35	*井上博士巡程変更(No34訳)	明治四四年一月二六日
34	井上博士巡回日割変更	明治四四年一月二五日
33	*井上博士講演(No32訳)	明治四四年一月二三日
32	中壢に於ける井上博士	同右
31	井上博士講演会	明治四四年一月二二日
30	*博士講演	明治四四年一月二一日

47	井上博士講演会	明治四四年二月一六日
48	* 博士消息 (No 47 訳)	明治四四年二月一七日
49	* 官紳紀事	同右
50	往来	明治四四年二月二〇日
51	* 官紳紀事 (No 50 訳)	同右
52	* 渡台中所感 (上)	明治四四年四月三日
53	* 渡台中所感 (下)	明治四四年四月五日
54	* 博士南游	明治四四年四月九日
55	* 博士寄附	明治四四年六月八日

1 (見出しなし) (明治四三年二月一五日)

井上円了博士、近日渡台の筈、

2 * 「官紳紀事」 (明治四三年二月一五日)

井上円了博士擬於近天抵台、

3 「井上博士の巡回講話」 (明治四四年一月八日)

文学博士井上円了氏は、先年哲学館大学退隠後の事業として哲学堂建設拡張に従事すると共に、各地に修身教

会設置を唱道し、数年来、内地各地に巡回講話を為しつゝありしが、今回約一箇月の見込にて台湾巡回を志し、来る十二日入港の笠戸丸にて着台、同日及び十三日は基隆哨船頭久宝寺にて、十四、十五、十六の三日間は台北に滞在、三回の講演をなし、其後は左の各地にて講演会を開く筈なり、

宜蘭、羅東、新竹、苗栗、桃園、台中、彰化、嘉義、斗六、鹽水港、台南、打狗、鳳山、阿猴、蕃薯寮、璞石閣、花蓮港、羅東、台南

なほ博士は何地にても需に応じ揮毫をなす由なるが、当地にては各宗寺院神島表具店にて之を取り扱ふ由、

4 * 「井上博士巡行講演」(明治四四年一月八日)

文学博士井上円了氏。前年由哲学館大学退隱後。則方拡張哲学堂。且唱設修身教会。数年以來。遍行内地各処講演。此次按約一個月間。巡行台湾。十二日将乘笠戸丸抵台。是日及十三日於基隆。十四五六等日於台北。暫駐文旌。在基隆之際。山田支庁長以次木村佐藤其他有志者。出為籌謀。延博士於該地哨■頭久宝寺講演。且對於請為揮毫者。設会於公益社。為執韓旋之勞云。

5 (見出しなし)(明治四四年一月一二日)

井上円了氏(文学博士) 本日基隆上陸の筈

6 基隆に於ける井上博士(明治四四年一月一三日)

井上円了博士は既報の如く、昨日入港の笠戸丸にて随行員中野氏と共に基隆に著し、同地官民有志の歓迎を受

け、直に旅館富貴閣に入りたるが、昨夜は有志の乞に応じ久宝寺に於て「実業興振」及「仏教と国家」の二題を講演し、本夜も又同寺にて「公德養成論」及「未来の有無」の二題を講演さるゝ筈なり、昨夜の如きは聴衆三百余名に達し盛会なり、昼間は有志の依頼に応じ得意の揮毫に随ひ居れるか、依頼者甚だ多数にして其書は本日中、富貴閣の下座敷に掲げて一般の観覧に供しつゝあり、同氏は明日午前台北に來り数日滞在の上、向一箇月の予定にて台湾各地方を巡視の筈なり、因に同氏來航の途中笠戸丸船中にて作れる左の如き漢詩四首あり

其一

風定檣頭夜寂寥。鎮西山外望晴霄。南溟寒月別成趣。不照梅花照暖潮。

其二

船奔碧浪白雲間。四面茫茫不見山。皇国版図何処尽。大風程外有台湾。

其三

笠戸船中電局開。閃光発処響如雷。家山絶遠君休説。波上忽傳消息來。

其四（船中狂作）

商船笠戸大如城。遙向台湾載客行。連夜講談交落語。三時樂隊助歡迎。

已開電局傳消息。更設写真慰旅情。況復佳殺慈味在。何人不発快哉聲。

基隆上陸の後博士は有志の依頼に依じて右の漢詩を揮毫し与へたるも尠からざりしと云ふ（基隆電話）

7（廣告）台湾教育会（明治四四年一月一三日）

來ル十四日午後二時ヨリ東門外第二小学校屋内体操場ニ於テ講演会ヲ開キ左ノ講演有之候間、會員諸君御參

会相成度候也（會員外有志諸君御參会随意）

明治四十四年一月

台湾教育会

一 精神修養法

文学博士

井上円了君

8 時事小言（明治四十四年一月一三日）

井上幽靈博士は這回來台せらる、土人の幽靈、生蕃の幽靈は以て好對手たる可、

9 *官紳紀事（明治四十四年一月一三日）

井上円了氏（文学博士）日昨抵台

10 *哲学演説（明治四十四年一月一三日）

茲有哲学堂主井上円了博士。將以其哲学館退隱以來所經過。渡台演説。即自明治三十九年迄四十三年。奉戴御詔勅之聖旨。所演修身及學術上所関等。其在台北開演之期。為一月十四五六之三日。聞其前此已開会一千三十
七市町村。演説二千二百廿七席。聴衆五十六万六千六百四十五人。然此猶屬前期五個年間。今後尚擬以中後二期即
十個年間。巡遍全国各郡。顧為補助開会之經費。与積立哲学堂之維持費。遂応人之依頼揮毫者。昨年十一月。該

学堂為此五個年間之總決算。收入二万四千余。支出二万二千余。尚剩一千二百余。則以充同年末之支給。今後擬增置庭園鑄造四聖銅像設備圖書館臨時諸費及基本金積立等。尚須五万円。則更期以十個年完成之。其学堂現在東京市本郷区駒込富士前町。将来且願於市外為修養的公園。永備社会公衆之共樂。

11 東洋協會講演会（明治四四年一月一四日）

東洋協會台湾支部にては既記の如く来十五日午後一時より国語学校両天体操場に於て講演会を開く由にて其演題左の如し

一 心理的妖怪談 文学博士 井上円了君

一 東西文明の衝突 文学博士 片山秀吉君

尚ほ当日井上博士は演講時間の前後に於て一般有志の需に応じ額面扇面■物其他の揮毫をせらるゝ筈なりと

12（広告）台湾教育会（明治四四年一月一四日）

来ル十四日午後二時ヨリ東門外第二小学校屋内体操場ニ於テ講演会ヲ開キ左ノ講演有之候間、會員諸君御参会相成度候也（會員外有志諸君御参会随意）

明治四十四年一月

台湾教育会

一 精神修養法

文学博士

13 時事小言（明治四四年一月一四日）

妖怪博士の名ある井上博士来本島、縦鼻横目の妖怪不少濟度方頼み上ぐ

14 * 博士近什（明治四四年一月一四日）

文学博士井上円了氏。如所預報。大昨日与從員中野某俱抵基隆。該地有志者歡迎之。投宿富貴閣旅館。因有志者請。在久宝寺講演実業興振策。仏教与国家二題。昨夜亦在同寺講演公德養成論。未來有無二題。是日聽講者。実有三百余人之多。昼間応需揮毫。聞博士日昨抵北滯留數天後。預定一月巡歷全島。博士有船中詩。録於後。其一風定檣頭夜寂寥。鎮西山外望晴霄。南溟寒月別成趣。不照梅花照暖潮。其二船奔碧浪白雲間。四面茫茫不見山。皇国版図何処尽。大風程外有台湾。其三笠戸船中電局開。閃光発処響如雷。家山絶遠君休説。波上忽傳消息来。其四（船中狂作）商船笠戸大如城。遙向台湾載客行。連夜講談交落語。三時樂隊助歡迎。已開電局傳消息。更設写真慰旅情。況復佳殺慈味在。何人不発快哉聲。

15 * 開講演会（明治四四年一月一四日）

来十五日午後一時。東洋協会台湾支部。将在国語学校。為井上博士及外一名開講演会。又本日因台湾教育会請。在東門外第二小学校体操場講演。但演題即精神修養法云。

16 *紀東洋協會講演会（明治四四年一月一五日）

東洋協会台湾支部。如前所報。擬於本日下午一勾鐘始。在國語學校雨天体操場。開講演會。其講題及講演者。即心理的妖怪談。文學博士井上円了君。東西文明之衝突。法學士片山秀吉君。又是日井上博士。為応一般有志者之需。擬於演講時間前後。為之書匾額扇面連其他等云。

17（広告）（明治四四年一月一五日）

来る十六日（日曜）午後一時より赤十字医院楼上に於て井上博士の講演会相開き候間、會員は固より會員外の婦人方も万障御練合せの上、御聴講被下度候也、但し服装は御随意のこと

台北婦人三団体

18 井上円了写真（明治四四年一月一六日）

（注）写真は前掲拙論二四六頁に掲載

19 無絃琴（明治四四年一月一六日）

円了博士は渡台後講演に寧日なしの有様であるのに朝日座では四谷怪談を演し、内地では千里眼の■話題に花が咲く、何となく空気も陰鬱となつて来た。▲併し円了博士が妖怪を■道した時代と今日の千里眼研究時代と比較すれば殆ど霄壤の差がある。博士の時代はバケモノグラフィイであつたが、今日ではバケモノロザーが成■する様になつた。▲十年前に在りては其他の方面より解釈を得んと欲して居つたが今日では其れ自身の研究をなす

様になつた。▲これは畢竟、独逸、亜米利加、特に米国に於ける実験心理学の研究の賜で彼の元良博士が精神物理学を研究し尋で変態心理学の発達に基づいて居る。丸亀、大阪等の透視者は一種の光線を放射するとの事であるが、其光線の性質は未だ物理学者の研究を経ぬ様であるが、兎に角、強ひて解釈せんと力めずして直接に研究の歩を進めんとするに至れるは学界の進歩である。▲往時は一学科その者のみを研究して広く他学の研究を参照せぬ為め強である一部に拘泥せんとする傾向があつた▲が今日に於ては整々たる各方面の研究の進歩に伴れて互に相助け相補ひ妖怪なども次第に其正体が知れかゝつて来て居る。兎に角、浦水博士の如き人を迎へたは本島の精神界に喜ばしき現象である。

20 一昨日の東洋協会講演（明治四四年一月一七日）

東洋協会台湾支部は、井上博士の来台を機とし、一昨日国語学校雨天体育操場に於て講演会を開きたるが、開会前満堂人を以て充たされ、聴衆二千を算するに至れり、午後一時を告ぐるや片山法学士は登壇し「東西文明の衝突」と題し開口一番（・・中略筆者・・）次に井上博士は高橋殖産局長の紹介によりて演壇に進み「心理的妖怪」なる演題に付き我日本程古来妖怪多きこと世界に比なく数四百以上に及ぶと前提し、

妖怪研究上、妖怪を物理的妖怪と心理的妖怪とに分別す、即ち物理的妖怪は物より生ずる妖怪にして、心理的妖怪は心より生ずる妖怪なり、此二者を称して妖怪といひ、妖怪に対して真怪といふものあり

とて、進んで幽霊は心理的妖怪なりと説き、千里眼透視眼の如きは変態心理に属するものにして、或る特殊の感覺が特殊の活動をなすものなりと断じ、世間の所謂不可思議は決して不可思議にあらず、妖怪は決して妖怪にあらず、眞の妖怪は人間自体たり、大宇宙自体たり、此を不思議と云はずんば何をか不思議と云はん、

之を妖怪と云はずんば何をか妖怪と云はんやとて、理由を叙して降壇し、午後四時散会したり

21 台北医院の精神講話（明治四四年一月一七日）

台北医院にては昨日午後四時より井上円了博士を招聘し院内の講堂に於て看護婦の為に精神講話を催したりと云ふ、

22 十把来（明治四四年一月一七日）

円了先生の渡台を機とし詩会を催しては如何、内地人のみにてもよし本島人を加ふれば更によし（蜂の腰押）

23 （見出しなし）（明治四四年一月一八日）

井上円了氏（文学博士）今朝十時■行

24 日の丸館の幽霊―幽霊博士と朦朧伯（明治四四年一月一八日）

日の丸館に幽霊とは陰陽の対照頗る妙ならねど、其日の丸館へ頃日来、幽霊研究の泰斗井上円了博士が宿泊せらるゝも亦奇妙なる処へ、美術学校を勇退して更らに美術院を組織したる東都朦朧派の驍将西郷孤月画伯が滞在し、恰も幽霊に柳を書き添へたるが如く、為に日の丸の光りも朦朧として暈したくなる心地せるが、日の丸館主人は斯かる好機逸すべからすと孤月氏に幽霊画の注文をなしたり、しかも其注文が普通の注文ならず、余り物凄しい幽霊を書いて貰つては臆病なお客が逃出して仕舞ふ故、そこは先生の腕前を以て恐ろしくなく物凄くなく中頃

加減の優しいやうな可愛いやうな幽霊の入神の作が所望なりといふにぞ、流石の画伯も閉口せしが、其処は朦朧派の泰斗丈けあつて腰から下は書消すとも頼まれた注文を打消す事が出来ず、宜しいと引受け種々苦心の結果先づ其模型を高砂検番の芸妓中成べく影の薄さうな人相から採り電燈に布を被せて写生する事数次、漸く次の日の没頃、絹面がボンヤリ黒ずむ時刻を計つて得意の朦朧体に現はし得た幽霊は、凄い中に愛嬌あり、淋しい中に華やかなる所ありて、成程注文通り出来上りたれば、日の丸館主人は大に喜び、早速井上博士の賛を乞ひたるに、博士も大に感心し、これの子が理想の幽霊ならば自分も是非一枚書いて貰ひたしと更に画伯に注文したので、今度は台北検番の芸妓からモデルを探らんと目下密に選択中なりとか

25 台湾神社参拝（明治四四年一月一八日）

中央製糖会社社長関清英氏は近藤青山両社員と共に昨日午前十一時台湾神社を参拝し、幣帛料を献納したり、又井上円了博士は一昨日午後五時、随員中野氏と本田台北庁員の案内にて参拝せり。

26 *博士巡遊日程（明治四四年一月一九日）

井上円了博士。經去十四五六等日。在台湾教育会、暨東洋協会台湾支部、愛国婦人会支部等講演完畢。遂由昨日動身。赴地方巡遊。其日程如左。

十八日／中壢／十九日／新竹／二十日／苗栗 廿一日／台中／廿二日／東勢角／廿三日／南投廿四日／彰化／廿五日／鹿港／廿六日／斗六廿七日／嘉義／廿八日／土庫／廿九日／鹽水港三十日／台南／卅一日／安平／二月一日／打狗二日／鳳山／三日／阿緞／四日／蕃薯寮七日／桃園／八日／台北／九日／淡水十日／頂雙溪／十一日／

宜蘭／十二日／宜蘭十三日／羅東／十五日／基隆

聞博士為籌充哲學堂之維持拈張費。在当地応一切揮毫之請。已達五百張以上。此後有意求為揮毫者。可向表具店及各寺院申請之云。

27 * 參拜台灣神社（明治四四年一月一九日）

中央製糖会社長関清英氏。於本月十七日午前十一勾鐘。偕同近藤青山兩社員。參拜台灣神社。獻納幣帛料。又文學博士井上円了氏。亦於本月十六日午後五勾鐘。帶其隨員中野氏。由本田台北庁員導往參拜云。

28 * 哲博將來（明治四四年一月一九日）

哲博將來哲學博士井上円了氏。原定日昨到竹。嗣因滯留中壢。以應該地人之歡迎。乃改定本月十九日到竹。在竹諸官民。擬延其赴新竹俱樂部。開演說會。並席上揮毫。以応一般人士之要求。聞希望氏之寶墨者。官庁有五十余人。民間亦如之。

29 * 旅館幽靈（明治四四年一月一九日）

幽靈研究泰斗井上円了博士。近投宿日之丸館。會東都朦朧派驍將西鄉孤月尽伯。亦來同寓。居停主人以為機不可逸。託孤月氏作幽靈之■。不忍過卻。乃於高砂藝妓中擇其一人。為種種之模型。先布被於電燈。次日日沒。復命以絹蒙面。而後刻意摹寫。果成一得意之朦朧體。寓愛嬌於淒婉之中。居停主人見之大喜。急請井上博士為作贊。博士亦大感心。且曰余當理想之幽靈。託其更作一画。聞目下正於台北檢番藝妓中物色之。

30 * 博士講演 (明治四四年一月二一日)

井上博士。如所報既於十九日到竹。本擬在俱樂部開講。因聽衆頗多。乃移於塚乃家本店。是日自午後六點鐘起。來聽者已接踵而至。雖夜間微雨霏霏。而広座幾為之滿。博士之演題。乃就御詔勅聖旨。關於精神修養。風俗矯正。公德發展。詳為講演。洋洋數萬言。聞者莫不為之感動也。

31 井上博士講演會 (明治四四年一月二二日)

廿一日午後二時から台中公學校に於て井上博士の講演會あり、中野氏は博士巡遊の趣旨を述べ、次で博士は「戊申詔書の大意」及び「教育と宗教との關係」に付二時間に涉り講演せり、來聽者七百余名盛會を極む (台中電報)

32 中壙に於ける井上博士 (明治四四年一月二二日)

去る十七日当地を發し南行の途に上られたる円了井上博士は十八日、中壙に立ち寄られ同地有志者の發企にて講演會を開きたるが、博士は戊申詔書及教育勅語に關して一場の訓話を為したるが、当日の來會者は中壙、安平鎮、揚梅壙の内天人五十余名外、本島人の篤志家等も多く見受けたり、而して博士は來會者の為め七十余枚の揮毫の需めに応じて綽々の余裕を示されたる等、同地に於ける非常なる盛會なりき、尚博士は同地出發に際し金 (* 一、二行不明・筆者) の厚意を高■は深く同地人士を感動せしめたりき。

33 * 井上博士講演 (明治四四年一月二三日)

井上円了博士十七日由北而南。十八日途至中壙。該地有志者為開講話會。博士將戊申詔書及教育勅語所関訓話

一場。是日来会者。中壠安平鎮楊梅壠内地人五十余名。外此本島人特志家復多有之。博士為応来会者之需。揮毫七十余幅。極其盛會。博士將由該地出發時。因寄贈十円于該地公学校。該地人士見其高義。深為感動焉。又聞廿一日午後二時。博士復在台中中学校開講演會中野氏先起述博士巡遊旨趣。繼則博士將戊申詔書大意及教育与宗教諸關係。講演互二時間。是日来聴者七百余名。亦会況極盛云。

34 井上博士巡回日割変更（明治四四年一月二五日）

台中に於て去る二十一日講演を了したる井上博士は二十二日台中より東勢角に到り、午後一時より同地公学校内にて精神の修養法に就ての講演あり、聴者二百名盛會を呈したり、同日は台中に引返して一泊せり、二十三日には台中より彰化に赴き午後六時より武徳殿に於て講演を為し、同地に一泊、二十四日には鹿港に到り更に台中に戻りて一泊せり、次で二十五日は南投に行き、二十六日は斗六に赴くべし、而して二月初旬より台南に共進會の開催さるゝあれば都合に依り台南の巡遊日割を變更し、即ち予定は来る三十日なりしが、之れを二月四、五の兩日に變更せり、従つて其前後に於ける巡遊日割は自然變更されたるが左の如し。

（一月）二十七日土庫▲二十八日二十九日嘉義▲三十日塩水港▲三十一日阿緞▲（二月）一日蕃薯寮▲二日鳳山▲三日打狗▲四日五日台南▲六日安平▲七日途中▲八日桃園▲九日十日台北▲十一日淡水▲十二日途中（頂双溪）▲十三日途中▲十四日宜蘭▲十五日羅東▲十六日途中▲十七日基隆▲十八日基隆出發

35 *井上博士巡程変更（明治四四年一月二六日）

井上博士本月廿一日。在台中講演畢。於廿二日。到東勢角。自午後一時始。在該地公学校内。講演精神修養

法。聽者二百名。極呈盛況。是日復歸台中。廿三日。自台中赴彰化。於午後六時始。在武德殿講演。是晚宿焉。廿四日。到鹿港。更返台中。擬廿五日赴南投廿六日。到斗六。又博士原擬本月三十日。前往台南。因二月初旬。台南將開共進會。故改其期為二月四及五兩日。為此其前後巡程皆因之變更。即一月廿七日土庫。廿八日嘉義。三十日鹽水港。三十一日阿緞。二月一日蕃薯寮。二日鳳山。三日打狗。四五兩日台南。六日安平。七日在途中。八日桃園。九十等日台北。十一日淡水。十二日在途中十三日在途中。十四日宜蘭。十五日羅東。十六日在途中。十七日基隆。十八基隆出瓮云。

36 *開會演說(明治四四年一月三〇日)

井上文學博士此次渡台。訂正月念八日上午九時余抵嘉。当地有志。擬臨駁前歡迎。于是日午後壹時至七時。在嘉義公學校內演說。其目的為教育勅語大意。及幽靈談精神修養法。及國家關係。心理的妖怪談等。壹切有志皆可隨意臨場參聽。但揮毫場所則按在俱樂部內。如有乞揮毫隨時立應。

37 *大演說會(明治四四年二月一日)

井上文學博士。已於去二十八日上午九點鐘四十九分到嘉。官紳往迎者不下百十人。寄宿嘉義旅館。定於是日下午一點鐘及七點鐘兩回。二十九日同上兩回以嘉義公學校為會場。演說教育勅語大意。幽靈談。精神修養法。及國家之關係。心理的妖怪談。揮毫場。定於二十九午前九時。以嘉義俱樂部揮為毫場。是日往聽者數百人之多。聽至妙處。無不拍手稱快。聞定於三十日午前十點鐘出瓮云。

38 世論一般（明治四四年二月三日）

先の伊沢先生の「国家教育宗」発行と共に、井上円了博士は又教育勅語の聖旨を普及貫徹の為め南船北馬、北は樺太朝鮮より南は琉球台湾に至る迄、足跡到らざるなく、熱心に其の宣布を努め、自ら忠孝宗の宣布者と称して国家教育宗、忠孝宗の如きものを洽く感得せしめんと努力せられつつあり、

我國民は由来、宗教心薄く信念に乏しく、随ひて道義上の事も兎角、其れ智識のみに傾きて信念の之に伴うものなし、是れ其の道義心の甚だ堅固ならざる所以たらずんばならず、国家教育宗、忠孝宗にして此信念を堅固にするを得ば、実に道徳上の大成功と謂ふべし、我等は伊沢先生、井上博士の蘊蓄深き教育上の智識と経験とが其

■ ■ ■ をして ■ ■ ■ に至らしめんを切望す。

39 * 博士将来（明治四四年二月四日）

嘉義官紳。近因文学博士井上円了師。不日来嘉視察。内地人二十四名。本島人四名。為發起人。刊刷広告。註明筆資。分發各支庁各区。俾好翰墨者豫備紙張求書。蓋博士為内地大手筆。字体蒼古。不在顏柳歐蘇之下。得其親筆墨。無異獲拱璧故也。

40 井上博士講演（明治四四年二月六日）

昨夜七時より旧公館にて井上博士の講演あり。来会者四百名。満場立錫の余地なき盛況を呈したり。（五日台南電）

41 *井上博士講演(明治四四年二月七日)

據台南電稱。井上博士。於本月四日午後七勾鐘。在旧公館講演。到会者四百名。滿場踰躋。幾無立錐之地。可謂極非常之盛況也。

42 (廣告) 井上博士講演(明治四四年二月九日)

井上円了博士講演

日時 九日午後三時ヨリ

会場 東門外曹洞宗別院

題 仏教の宇宙觀及人生觀

台湾仏教会

43 (廣告) 井上博士講演(明治四四年二月一〇日)

井上円了博士講演

日時 今十日午後三時ヨリ

会場 府前街東本願寺布教所

題 勅語と仏教

台湾仏教会

44 * 博士講演（明治四四年二月一日）

南巡之井上博士。於月之三日午後七時在打狗公館内。大開講演。当地人士無不出頭參聽。竝求揮毫幅素。以爲紀念云。

45 * 官紳紀事（明治四四年二月一三日）

井上文学博士訂十八日自宜蘭旋基即日歸還内地

46 井上博士揮毫・写真（明治四四年二月一五日）

（注）写真は前掲拙稿二四六頁に掲載

47 井上博士講演会（明治四四年二月一六日）

嘗て本島巡遊中なりし井上博士は、一昨十四日午後二時より宜蘭俱樂部に於て同地愛国婦人会員の為、「教育談」なる演題の下に講演せられたるが、聴衆約三百余名にして盛況を呈したり、又同日午後七時より一般公衆の爲め同所に於て小松会長の紹介に依り、戊申詔勅の大意と妖怪談なる二題に就いて縷々説述せられたるが、午後十時終了散会したり、著名なる同博士の事として聴衆無慮五百名を越え同地にては未曾有の盛会なりき、

48 * 博士消息（明治四四年二月一七日）

文学大博士井上円了氏往游宜蘭一節。前報誌之矣。聞本十四日為愛国婦人会員請。在宜蘭俱樂部為講話。（問

題教育談）來聽者約三百名。又同日下午因小松庁長介紹。在同所為講話。（問題戊申詔勅大意及妖怪談）同十勾鐘畢話。來聽者無慮五百名。頗極盛況云。

49 *官紳紀事（明治四四年二月一七日）

井上文学博士十八日就途歸京

50 往來（明治四四年二月二〇日）

井上円了氏（文学博士）一昨日内地へ帰還

51 *官紳紀事（明治四四年二月二〇日）

文学博士井上円了氏大昨日就途歸京。

52 渡台中所感（上）（明治四四年四月三日）

有在京訪問員。訪問日前渡台井上円了文学博士。博士語如左。

我輩居内地。據地図想像台湾。意者如九州山岳之多。市郵当散在諸山沢間。与九州不異。今次渡台実則与想像者全殊。台湾之平原渺茫。土地肥沃可望也。初懼虐疾亦痢傳行。意外衛生上之施設。市街之整備。及官衙之壯麗。凌駕内地而上。是不獨吾儕之所感。抑渡台一般人士之所感也。所可異者台湾不甚与日本同化。台湾島民有幾百年之異国歴史慣習。況婦隸期日尚短。僅僅十四五年間。施政之方針雖巧妙亦不能迅速若此。台湾現風俗上最刺

戰吾人眼膜者。辮髮与纏足。辮髮之陋。固不待云。纏足則人道上之問題。不僅風俗上之問題也。台灣人遵奉孔教。而孔子孝經身体髮膚受之父母。不可毀傷。台灣人乃敢行此蠻行。違背孔教。而戕害天然之兩足也。今次台灣斷髮会起。辮髮者漸少。洵可欣喜。雖然禁纏足会不起。吾人之心。尚未能滿足也。禁纏為今日之急務。即以法令厲行之亦当不妨。嘗謂風俗上之改良。於台灣不多見。斷髮会之唱。所当刮目。論其動機。其起於支那对岸之流行。本島人起而效之。則斷髮之價值若有若無。其起於辮髮乃野蠻的。不可不早一日去。台灣人自覺之心。則斷髮之價值不可勝道也。台灣人既為我國文明之國民。則不宜墨守故国之旧慣習。雖然支那人之慣習中。有善者則取之何妨。若辮髮与纏足。非善者也。物有本末。事有先後。吾人意中。竊謂禁纏之会。不宜後於斷髮会。

53 * 渡台中所感(下)(明治四四年四月五日)

台灣僧侶。多缺智識。宗教之發源亦低。然台人則信仰之有素。故欲指導台人而使之同化。則当囑公學校之教育。如何究備。以鼓吹其有母国之神智智識習慣。然僅恃此。亦未可容易成功。必也於宗教一面。兼為鼓舞以漸漬之乎。蓋台人自有特種宗教。即合儒仏二者。以成其混合之教。然其中亦多偏重於仏教一途。故与母国共通之点。甚見多数由此觀之。則欲由宗教以啟發台灣。当先以日本僧侶。啟發台灣之僧侶也。夫公學校之教育。雖為台灣當務之急。然僅以是為鼓吹同化之舉。而不採夫宗教一途。以利用其信仰之心。則同化之效。必難膚奏。何則。學校之教育。雖如何完全。而一歸家庭。則破壞立尽矣。蓋彼在公學校時。雖灌注以日本之精神智識言語習慣。而在家庭則所用不同。所接亦異。処親戚友朋環聚之中。日以互異之精神智識言語習慣。為之薰蒸。豈不習与性移耶。此所以學校之灌輸日本的精神智識言語習慣。日焉孜孜。而同化旋未易舉也。似此。其当於家庭生活。並為著手改善乎。夫天下之最足以誘化家庭之思想感情者。莫若宗教。而最足以濟度世間之善男女者。莫若僧侶。故養台灣僧

侶。以日本的智識。最為切要。而日本僧侶之主持於感化台灣僧侶者亦當取其宗教根源。同出一本。夫而後可以徐徐進步。而改善其家庭社會、信仰、性情、風俗。以至於同化也。台人信仰之神。有觀音、羅漢、孔聖、閔聖、天妃諸神。其深印腦裏。決未可輕排。如北港等處天妃。其祭典焚化紙帛。年達五十萬元。以外可勿具論其信仰之熱烈為何如耶。況孔聖觀音諸神。內地亦崇祀之。強為廢撤。必有不能。然欲使台人更進而就日本之化。則當使彼崇信之神。與日本之神並祀。最為感化之良途。予「井上博士自云」渡台中。有以祀何神為問者。其人意見頗以楠公為適宜。然楠公與管公。均為日本特奉之神。於台灣未可云適也。必也其太閤與時宗。於外國英名赫耀者為最宜者。蓋二神並祀。則於崇拜信奉之神時。見有不知不覺之神。必起疑問。以後如漸知其由來。則敬慕之心。必油然而起於腦際且可以補助夫歷史的教育。如是。則有心於引導台人之同化者。可不研究之耶。予漫遊台灣中。可以銘刻腦裡。頗不一端。然如鐵道之發達。則真令人不可不驚其神速。此最印象之大者也。

54 * 博士南游（明治四四年四月九日）

井上巴了博士。自明治廿三年十一月至本年二月。前後凡二次周游全國。皆仰體御詔敕之聖旨。演述修身道德大要。其開會之處。合琉球台灣樺太朝鮮小笠原。凡八十七國。一千五百七十九市町村今後苟有餘年。尚當巡徧全國所未到之郡。然常以視察南洋及南美殖民地之風教為必要訂由四月一日始。即乘便船。第一先向濠洲由是復巡航南洋諸島及南美諸州。而後歸朝茲獲見其七絕三章。附錄於左。亦以見博士之雄心勃勃也。詩曰東去西來知幾年。壯心一片老逾堅。微衷聊欲扶皇運。又上南洋万里船。北馬南船送老涯。今年又背墨堤花。死山斃海何須厭。天地原來是我家。老來拋去百家書。意氣揚揚鵬不如。樺海台山猶覺狹。垂天翼向洋舒。

55 *博士寄附（明治四四年六月八日）

曩日渡台之井上博士。于台中彰化鹿港東勢角等所得揮毫料。共六百一円余。近以其中四十円。寄附于建立中之台中神社。

【註】

- (1) 佐藤厚「井上円了の台湾巡講に関する資料（一）」（東洋大学井上円了研究センター『井上円了センター年報』二六、二〇一八年）